© Nic Walker

Featured Artist

挑戦者にして伝統の継承者

リチャード・トネッティ

世界最高峰のオーケストラのひとつだと筆者が確信する団体、オーストラリア室内管弦楽団（ACO）は、チェロを除く全員立奏で、曲ごとに立つ位置も変えて、自由奔放に演奏するスタイルを早くから実践してきたことでも知られる。

アンサンブルを磨き上げ、牽引してきたのが1990年から芸術監督をつとめているヴァイオリニスト・指揮者のリチャード・トネッティ（1965年キャンベラ生まれ）である。

その彼が、7月に紀尾井ホール室内管弦楽団（KCO）を指揮するために（そしてヴァイオリンも）、10月には手勢ACOを引っ提げて紀尾井ホールにやってくる。

みずみずしい響きと驚きに満ちた演奏

2018年の秋に、彼らのコンサートを聴くためにシドニーに出かけたときのことは今も忘れられない。そこで聴いたのはベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲と交響曲第5番だったが、弦は全員ガット弦、管楽器や打楽器も古楽器を使い、ピッチもA＝430と19世紀初頭の演奏様式を意識していた。ACOの完全雇用メンバーは弦楽器だけで、楽曲の編成に応じて世界各地の管楽器奏者と契約するのだが、2018年 シドニーで用いられた古楽器はわざわざヨーロッパから取り寄せたとも聞いた。そうした周到な準備の末にトネッティの統率のもと演奏されたのは、気迫のこもった、みずみずしい響きと驚きに満ちた、素晴らしいベートーヴェンであった。

ヴァイオリン協奏曲の第1楽章で、トネッティが演奏していたカデンツァも独特で、過去のさまざまなカデンツァからの合成を含む、ティンパニも参加する巨大なスケールを持つものだった。この自由な即興はどれほど遠くまで羽ばたくのか、と思わせておいて、最後は元の場所に着地する。それは息を呑むような瞬間だった。第1楽章が終わった後に思わず会場から拍手が沸き起こったほどである。

演奏者の一人であるという本能的な姿勢

トネッティの指揮は極めてユニークなものだ。普通にタクトを振るときもあるが、ヴァイオリンを持ったまま弓で指揮し、状況に応じて第1ヴァイオリンにしばしば加勢する。指揮者だけがその他大勢を統率するというのではなく、演奏者の一人であるという姿勢を本能的に保持している感じ

だ。そうして作り出されるアンサンブルは、指揮者を含めて全員が同じように音楽に対して平等に責任を持つという雰囲気になる。

トネッティは、筆者からの取材に応えて、自身の音楽的姿勢について次のように述べてくれた。「早い段階から、いわゆる古楽の革命的な精神を受け入れてきました。私は常にアンナー・ビルスマやニコラウス・アーノンクールのような先駆者に勇気を与えられ、ヘルベルト・フォン・カラヤンや大きなオーケストラの支配する既存のクラシック音楽に挑んできました」。ここでトネッティがはっきりと、カラヤンや大編成のオーケストラが支配する既存のクラシック音楽に挑戦してきたと明言したことの意味は大きい。

© Nic Walker

そもそも室内管弦楽団とは何だろう？大編成ではないちょっと小ぶりのオーケストラというだけであるはずがなく、既存のオーケストラに対するアンチテーゼを打ち出しているのではないか。

トネッティのこの姿勢は、ACOのレパートリーにも表れている。J.S.バッハのみならずコレッリやC.P.E.バッハなどを含む多様なバロック音楽から、古典派やロマン派の名作だけでなく、室内楽の編曲版も多い。近現代のレパートリーもアルヴォ・ペルトやジョン・アダムズ、さらにはピンク・フロイドやマイルス・デイヴィス、さらにはダンサーや映像とのコラボレーションに至るまで、広大なものである。ACOは古楽器と電子楽器をハイブリッドに操ることのできる稀有な団体でもある。

伝統との強いつながり

トネッティは単に革新というだけでなく伝統との強いつながりも持っている。彼のルーツを探ると、そこには少年時代に師事した、英国出身の名ヴィオラ奏者ウィリアム・プリムローズ（1904-82）の名前がある。

プリムローズはかつて大指揮者アルトゥーロ・トスカニーニのもと、NBC交響楽団の首席ヴィオラ奏者をつとめていた人物でもある。そのプリムローズからトネッティが学んだのは、「柔らかいポルタメント、つまりひとつの音から次の音へと移る技法の美しさ、独特に揺れるヴィブラート」なのだという。つまりトネッティとACOの中にはトスカニーニとNBC交響楽団のDNAが継承されているともいえる。

さらに、トネッティと日本とのつながりは深い。トネッティはプロムローズの日本人の妻であるヒロコ・プリムローズにも師事している。プリムローズ夫妻は、オーストラリアの弦楽器教育に初めてスズキ・メソッドを取り入れたことでも知られる。また、これまで毎年トネッティは、北海道ニセコ町をメンバーと訪れ、同町のホテルなどでミニコンサートを行い、当地の人々と親交を温めてきた。

いわば根っからの日本びいきともいえるトネッティにとって、紀尾井ホール室内管弦楽団との共演、そしてACOの東京公演は、コロナ禍でのキャンセルを経た後だけに、いっそう心に期するものがあるに違いない。

文／林田 直樹
（音楽ジャーナリスト・評論家）

© Stephen Ward

リチャード・トネッティ

紀尾井ホール室内管弦楽団 第135回定期演奏会

7/14（金） 19:00　7/15（土） 14:00

［出演者］
リチャード・トネッティ（指揮&ヴァイオリン）

［曲目］
キラル　：オラヴァ
ハイドン　：交響曲第104番ニ長調 Hob.I:104《ロンドン》
武満徹　：ノスタルジア ～アンドレイ・タルコフスキーの追憶に
モーツァルト：交響曲第41番ハ長調 K.551《ジュピター》

リチャード・トネッティ&オーストラリア室内管弦楽団

10/10（火） 19:00

［出演者］
オーストラリア室内管弦楽団
リチャード・トネッティ（リードヴァイオリン）

［曲目］
ヤナーチェク　：弦楽四重奏曲第1番ホ短調《クロイツェル・ソナタ》
ハース　：弦楽四重奏曲第2番 op.7
ベートーヴェン：ヴァイオリン・ソナタ第9番イ長調 op.47《クロイツェル》
（全てトネッティ編 弦楽オーケストラ版）

後援:オーストラリア大使館

※公演開催についての最新情報は紀尾井ホールウェブサイトをご確認ください。